

The Second Year of the Training Course of the English Pronunciation through "the Exaggerated Method"

SHIGERU TAKENO

ABSTRACT

This paper reports on "the Training Course of the English Pronunciation through the Exaggerated Method" in Miyazaki Municipal University. This course is innovative and unique in the English Language Education in Japan. It is not only a pronunciation training course but a cross-cultural training course. Ms Ryoko Nakatsu, a famous non-fiction writer in Japan, began this training about 20 years ago, but it has not been prevailed all over Japan. The author was trained by her 10 years ago. The author believes that the training course is good for the Japanese students of English Language as a communication tool.

The aim of this paper is to give an outline of the pronunciation training course and to argue the issues of the English Language Education in Japan.

本学における「増幅法による英語音声訓練授業」について — 2年目を迎えて —

竹 野 茂

はじめに

筆者は1994年度の宮崎公立大学人文学部紀要への投稿記事「本学における『増幅法による英語音声訓練授業』について」(以下、前稿)を著し、本学で行われている英語音声訓練の一部について述べた。1994年度はじめて開講された授業であったので、前稿は年度途中での報告になったが、本稿では前年度の一年間の成果を踏まえて、「増幅法による英語音声訓練授業」の全体像を明らかにしていきたい。

前稿は理論部分を中心に訓練の前半部を述べた。本稿では主に訓練後半部分と訓練成果を中心に述べるつもりである。具体的には、発想訓練・スピーチ訓練・自作スピーチ訓練などを中心に行っている。訓練の目的・特色・方法・カリキュラムの主要な部分は前稿を参照していただきたい。

受講生

昨年度と本年度の受講生の構成には違いがある。昨年度受講生が全員教職希望者であったのに対し、本年度の受講生は教職希望者を中心に英語を使う職業に就きたいと思うものが受講している。また、昨年度は33名の希望者全員を受け入れたが、本年度は36名の希望者があり、面接の結果28名に絞り込んで開講している。

面接の目的は、この訓練が1年間という時間制約の中で一定の成果を上げるために、1年間の訓練で成果をあげられると判断されるものを選ぶために行った。たとえ選に漏れたといえども訓練成果が得られないわけではないが、1年以上を要するであろうというものについては今回は遠慮してもらった。昨年度の訓練に置いて30名を越える訓練生を週1時間の中で訓練することが困難であったという反省から、理想は25名であろうと判断した結果人数を絞り込む必要もあった。

面接は1グループ5名の集団面接という方法を採用して行った。一人ずつ日本語で氏名・出身地・この訓練を受けようと思った動機について話してもらい、中津燎子先生と筆者で協議して訓練生を選んだ。中津先生は未来塾(1982年～現在)での経験によって、学生の音声を聞くことによって訓練に適応できるかできないかの判断をされた。

これはあくまでも目安であるので、選に漏れた学生には、選に漏れたことで能力がないということではなく、他の人が1年間で仕上がるところが2年くらいかかるということであって、1年間で成果があげられなかったことによる挫折感を感じさせないという意図があるのだということを十分に話して納得してもらった。できることならば全員を受講させたいのであるが、本学全体のカリキュラムとの兼ね合いやトレーナーの人数と持ち時間数の問題などがあり、現時点では実現不可能である。将来的にこれらの問題を解決し、本学の学生全員にこの訓練を経験してもらいたいと考える。

授業時間数の設定

本学の授業は1 Semester(1年の半期)13時間を基本に行っているが、この訓練では、訓練の特殊性から通年で48時間という変則的なカリキュラムをとっている。前述の未来塾では週1時間の訓練で1年

半かけて行っているものを1年に圧縮した形を取っているために、このようなカリキュラムを特別に組んでもらった。未来塾の訓練生と本学の訓練生の違いは、前者が成人・社会人を中心に行っているのに対して後者は学生であるという点である。この訓練は知力も必要であるが、訓練生自身の肉体を駆使して行うものである。若さは最大の武器になり得るのである。若い時期にこの訓練を集中して行うことで効率的に訓練ができるという利点がある。その反面前者の場合、社会の中で必要性を感じて訓練を受けているので、動機・訓練にたいするいわゆる「食いつき」は学生よりも旺盛であるだろう。

大学生の時期にこの訓練を受けることのメリットとしては、考え方が柔軟なだけに吸収が速いことと、厳しい訓練にも耐えられるという点である。留意点としては、一つ一つの訓練に対して常になぜそれをやるのかを説明しながら、目的と理由を学生に考えさせることがあげられる。そのためには通常の授業の2倍の時間が必要である。

英語音声訓練の経過

第一回の授業は、オリエンテーションである。ここで、この英語音声訓練が目指すものを大まかに説明する。趣旨を学生に十分納得してもらった上で、訓練に入ることを目指している。1995年度は、英語音声訓練開講2年目ということで、昨年度受講者の中からできの良かった三名を選び、体験談とスピーチのデモンストレーションをしてもらった。このデモンストレーションでは、訓練の目標音を認識してもらうのが目的である。一年間の訓練を通して、どの程度の音声になるのかを明確にし、学生にインパクトを与えるのである。

「受講生」の項でも述べたが、本年度は面接を実施している。

また、中津先生が朝日新聞の記事(参考資料参照)を題材に、言語コミュニケーション・ディベートについて音声訓練との関連をあげながら話された。「音声訓練の目的は、異文化間コミュニケーションにある。確固たる英語音声を伴った発言をしなければ、コミュニケーションが困難になる。」という内容だった。

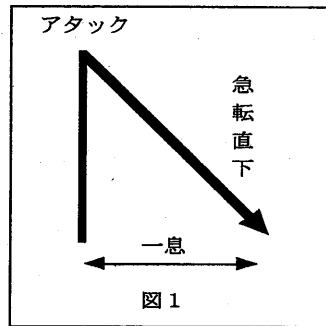
英語音声訓練の大まかなカリキュラムは、前稿で述べたとおり六つの段階に分けられる。訓練の方法について、一段階ずつ具体的に詳しく述べてみることにしよう。

【第一段階】

「増幅音」によって、アルファベット26文字の発音法をマスターする。「何だ、大学生にもなってアルファベットをやるのか」と思われるかもしれないが、この26文字の発音をマスターすることによって、英語のほとんどすべての子音と一部の母音をマスターすることが出来る。ただの音だけではない。これを増幅法(前稿参照)によって行うことにより、呼吸法をマスターすることも兼ね合わせている。いわゆる腹式呼吸をマスターすることで、息と声とを同時に出し(訓練では語頭の「アタック」と呼んでいる)、息を出し切ることによって、イントネーションを一気に下げる(「急転直下」に落とす)ことができるようになる。つまり語頭における音の「角付け」をマスターするのである。(図1参照)この段階ではひたすら妙な小節を持ち込まないようにする。また、語頭の子音とそれに続く母音との分離もねらっている。日本語では子音と母音が一体化しているために、とかく英語においても子音と母音の分離がなされないものである。特にアルファベットでこれを行うのは、アルファベットが日本語に深く入り込んでいて、日本語音で発音していても気づきにくく、それ故聴覚が発達してくれば英語音と日本語音のコントラストがはっきりわかるためである。Bの発音を例にとって見ると、発音記号では[bi:]であるが、日本語音だと[b]という子音と[i:]という母音が50%と50%の割合で融合し「ビー」となるのに対して、英語音では[b]という子音と[i:]という母音が80%と20%の割合で分離した形で発音される。それだけ英語音では子音の破裂部分の割合が大きいということに気づかせるのである。

口形のマスターもこの段階でマスターさせる息を有効に使うために、独特の口形を訓練する。英語音を発するためには、口輪筋を駆使しなければならない。そのために鏡を利用し、訓練生個々が自分自身の唇を意識し、鍛えるのである。

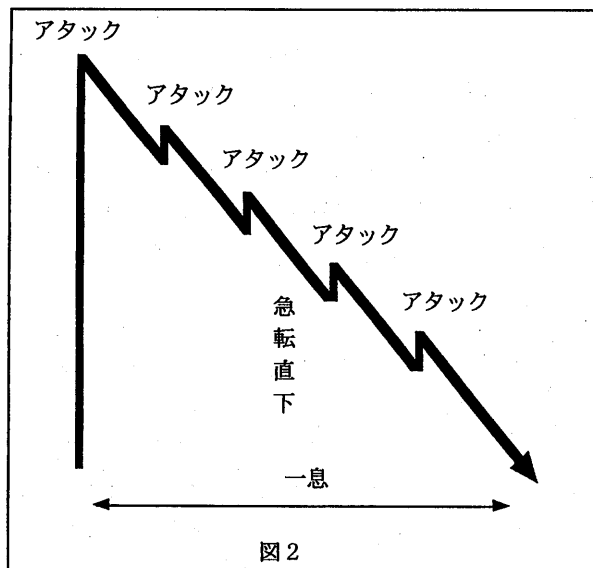
この訓練全般において集団訓練という形態で行うが、これには理由がある。他人の音と自分の音とを聞き比べることによって、音の微妙な変化を聞き分ける聴覚を作ることができる。実際訓練では、訓練生各人が小型のテープレコーダーを用意し、訓練すべてを録音してもらい何度も聞き直してもらう。それも自分の発音だけでなく、他人の発音にも注意し、どのような違いがあるか聞き分けてもらう。他人の発音のあらの方が自分の発音のあらよりも速く気がつくため、他人の欠点を抛り所にして、自分の音に気づくという手法をとる。また、自分や他人に対するコメントから情報を得るという大切な情報収集能力を養うのである。これは異文化対応訓練としての英語音声訓練にとってはとても重要な点である。



【第二段階】

アルファベット個々の音の訓練を一通り終えると、個々の音の訓練と並行しながらアルファベットの五連結を訓練する。ABCDE, FGHIJ, KLMNO, PQRST, UVWXYZというアルファベットの文字列を一息で発音する。五連結とはいえ、アルファベットの個々の音のアタックに気をつけ、全体が急転直下で発音されなければならない。(図2参照) 息のコントロールと口形のスムーズな移動とをマスターする。文章に移行したときに、必要になるテクニックをマスターするのだ。この段階では、増幅音から原音への移行を意識しながら訓練する。子音と母音の分離を意識するために、英語五〇音を訓練する。日本語音と英語音の違いをはっきりさせる。

ここまでの段階で要する時間は、10コマ程度(約2カ月)である。



【第三段階】

この段階では、いよいよ英語の単語の発音に移る。ここで取り上げる単語はカタカナ英語として日本語に入り込んでいるものを使う。これも第一段階で述べたように、英語音と日本語音のコントラストがはっきりわかるためである。つまり英語では英語音、日本語では日本語音を切り替えて使えることを目指す。

トレーニー（訓練生）が日本語文化と英語文化のはざまに身をおきながら、日本語と英語の双方を客観視できることを目指すのがこの訓練なのである。違いを違いとして認める態度こそ異文化対応の基本である。（〈参考資料〉単語一覧、参照）

この段階の途中で、夏休みを迎えることになる。夏休み前に理論的なことをどこまで理解しているのかを測るために、記述テストを行う。実際に自らの肉体を駆使して音声が出せるかどうかは別にして、何の目的でこの訓練を行っているのか納得しておいてもらうのがこの記述テストの目的である。たとえテキストの丸暗記でも、訓練が進むうちにその意義は理解されると考えたからだ。しかし、理論的なことが一切頭の中に入らない場合は、訓練を続けていくことすらおぼつかなくなる。中間点の締めくくりとするために行うのだ。

【第四段階】

音声表現 (I)

短い詩を題材にして、自分を他にアピールする目的で音声表現する。これまでの段階の音作りの基礎を前提として行われるもので、音と息の規定量を満たしていることが要求される。また詩の内容を解釈し、それにともなったリズム作りと一つ一つの語の持つ語感を音声で表現することを目的とする。

実際には、「ソロモン・グランディ」というマザー・グースの一篇、「グリーン・スリーブズ」「風に吹かれて」というフォークソングを二編、学生に読んでもらって訓練する。

この段階の終わりは、丁度9月の2日間の集中講義に当たる。この集中講義の中で発想訓練（論理的異文化対応訓練）を行う。「20の扉」を日本語と英語のセッションで行う。この訓練の目的は、(1) 聴く、(2) 考える、(3) 判断する、(4) 質問するという4つの作業を瞬時に行うことにある。つまり情報収集におけるトピックの絞り込みを集団で行うのである。ルールとしては、(1) 出題者が考えているもの（具体的な物の名前）を一人一問の質問をして、グループで当てる。(2) 出題者が、「YES」「NO」「両者考えられる」の3種類の言葉で答えられるような問いを作る。(3) 質問回数あるいは時間制限を設け、その中で解答を引き出す。

この発想訓練を行うことによって、学生たちはいかに情報を絞り込むか（カテゴライズ）を学ぶ。情報を収集するという事は、この段階で初めて出てきたことではない。実は、アルファベットの段階から始まっているのである。アルファベットの段階では一人一人の学生がただアルファベットを発音していくのではなく、自他の音を聞き、自分へのコメントと同様に他人へのコメントも聞くことによって、情報収集をしているのである。第四段階くらいになると大体自他の発した音を聞き分ける聴解力がついてくるので、改めて発想訓練という形で整理しているだけのことである。しかし、実際にこの訓練を行うと、学生たちは物事の絞り込みがいかに曖昧であるかということに気付くはずである。

第1回目の出題では、何もコメントしないでやらせてみる。すると25人終了したところでも答えに行き着かないのである。形も大きさも色も特定できない事態が生じる。日本語の世界で、日頃から物を特定する場合に、このようなカテゴリーで、物事を絞り込まないで、雰囲気や「察して」いるということに気付く。これを英語になおしても、英語にならないような質問を並べ立てるのである。しかも、中には出題者が「YES」「NO」で答えられない質問をする者、質問すら考えられない者もいる。また集団で行うのであるから、前の人の質問に関連させていくのが効果的であるにもかかわらず、他人の尋ねたことを聞いておらず、つながりのない質問がバラバラにだされるのが特徴的である。最初の数回は、日本語の曖昧さに気付かせるセッションを行い、徐々にコメント・留意点を解説していく手法をとる。理由は、初めから留意点を教えてしまうと日本語の曖昧さに気付かず、ただ技術のみを習得することになるからである。常に学生自らの日本語・日本文化に直面させるのがこの訓練の目的の一つであるから、発想の技術だけを教えることは本分ではない。

日本語の発想訓練の段階を経て、英語の発想訓練に入る。目的・ルールは日本語においても英語においても同じである。留意点をまとめると以下ようになる。

（題材）「物」の名前：

動物（人間など）、植物、人間が作った物。

(質問を作る場合の留意点)

- (1) size, shape, color, sex は、最低限明らかにするようにする。
- (2) その際、形容詞を使うことがあるが、必ず "adjective + like ~" と具体的に尋ねること。
質問者だけが分かる基準ではなく、常に他人が分かる基準で質問することに心がける。
- (3) 声は大きく、クリアに発すること。これも他人がそれを聞いて、情報を採りやすくすることを考えた発言をする。他人と協力して、物事を解決する場合には必要不可欠である。(他人とのコミュニケーションの訓練)
- (4) できるだけ短いセンテンスで質問する。特に英文の場合、関係代名詞を含む文章を避けること。
具体的には、8～10語以内の英文が適切。
- (5) 短いセンテンスでの質問は、音的に画一的になるきらいがあるが、それをこれまでに訓練した音声表現を利用して、感情をこめるようにする。それによって、微妙なニュアンスも引き出せることもあることを学ぶ。

[第五段階]

音声表現(Ⅱ)

スピーチの段階である。題材として、チャップリンの映画「独裁者(The Great Dictator)」の最後のスピーチとマーティン・ルーサー・キングのワシントン大行進の時のスピーチ "I have a dream" を取り上げる。スピーチは、ある主張の上になり立っており、説得、駆け引き、攻撃、情緒などが織り込まれる。その主張を織り込む練習としてこれらのスピーチを取り上げる。これらは非常によく知られたものであり、使用されている語彙も、文構成も明快で単純であり、練習時に自分の個性による解釈、表現がたやすいという理由で選ばれた。語感やストレスは人の真似ではなくすべて自分の解釈・判断で作る。その際無意識のうちに自分の中の日本語感覚で抑揚を作るので、ここまでの段階の訓練に立ち返り、音を作り、つないでいく段階である。

既成のスピーチであるので、学生一人一人の英文の解釈力も影響する。音声表現の向上と解釈力との間には相関関係がある。音声表現が上達するためには、英文を見て、瞬時に意味内容を把握する必要があり、また解釈したものを己の肉体を駆使して、瞬時に音声にするのであるから、音声の理論は分かっていただけでは不十分で、十分な練習が必要になってくる。この部分が「訓練」たる所以である。ただの解釈ではない。学生自らのものになっていなければ、血の通った「スピーチ」にはならないのである。

[第六段階]

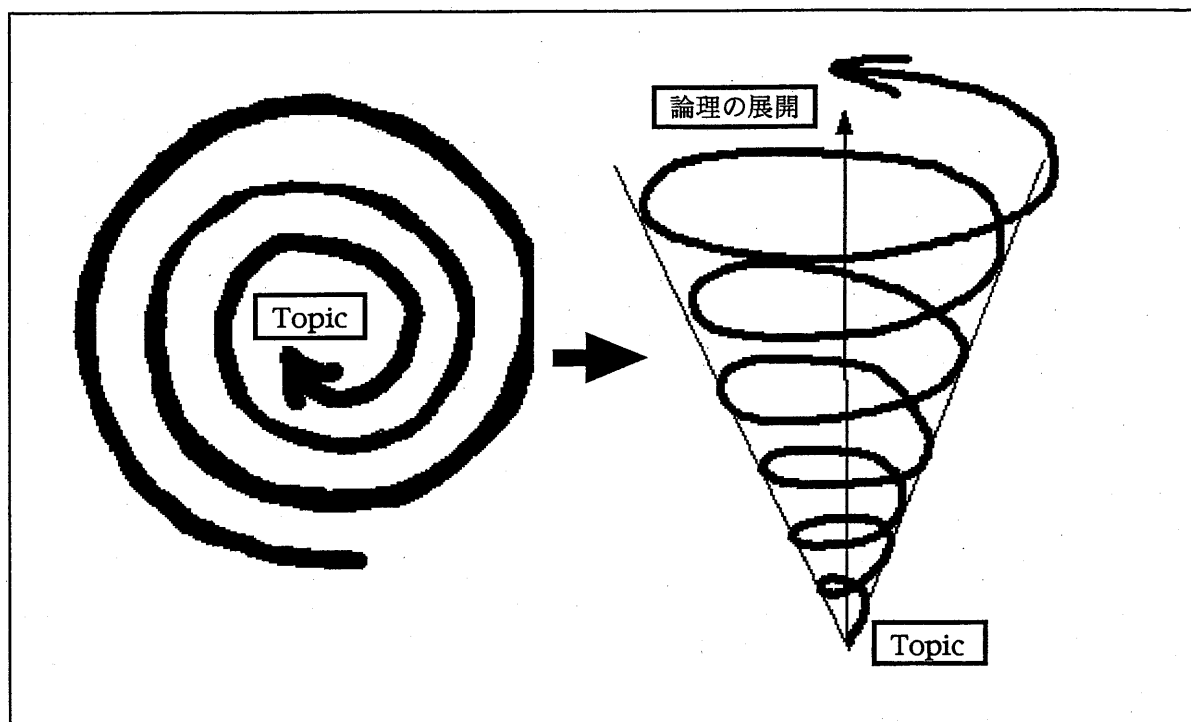
音声表現(Ⅲ)

この段階では、当初、「自分の声の質量、癖、傾向などを徹底的に分析した結果、与えられた素材ではなく、自分にあった題材・素材を訓練生自らが選んで朗読発表する。自らのスピーチでもよい。」としていたが、訓練生自らが「紹介スピーチ」を英文で作り、それを最終段階で発表してもらうことに変更した。

この「紹介スピーチ」とは、神田外語大学の松本茂助教授が『現代英語教育』の1995年10月号で言及しておられるものである。すなわち、「家族、ペット、親戚のうち誰でもよいからクラスのみんなに紹介したい人(動物・昆虫など)を選んでスピーチしてみよう」というものである。実際に学生たちが取り上げた話題は、「旅行先での出来事」「好きな食べ物」「感動した映画」「私の友人」など多岐にわたっていた。

「紹介スピーチ」の準備として、前述の松本助教授がNHKテレビで担当された「3ヵ月英会話スピーチ」講座テキストからの抜粋を学生たちに読ませ、「紹介スピーチ」の構成について数回講義・訓練した。それをもとに訓練最終の3日にわたる集中講義の中で、口頭発表と添削を行った。添削の要点としては、トピックセンテンスと論理性である。学生たちはスピーチ作りになれていないせいか、最初はトピックを絞り込むことが非常に困難な様子であった。3日の集中講義のうちの2日を「紹介スピーチ」に費やしたが、短時間ということもあり、学生もトレーナーも大変な労力を費やした。しかし、その甲斐あって、ほとんど

の学生が満足のいくものを発表してくれた。情報を発信する場合、トピックを絞り込むということがいかに重要であるかを学生は認識したように思う。その際に、多くの学生が日本語の論理と英語の論理体系が異なるということに経験的に気付いたというものが多かった。トピックを伝える場合に、そのものを説明しないで、周りの状況や雰囲気を伝えようとするもの（蚊取り線香的思考）が多く、これをまずトピックがありそれに肉付けしていく（逆スパイラルな）論理構成に直す作業が大変であった。



[蚊取り線香的思考]

[逆スパイラル思考]

昨年度の反省を踏まえて、今年度はまず2カ月前に原稿を提出させ、その原稿を数回にわたって手直した上で、発表させることにしている。昨年度のスピーチでは、大変楽しませてもらったので、今年度も期待しているのであるが、どのような成果をあげることができるであろうか。今後の訓練の伸展状況を見守りたいと思っている。

訓練の総仕上げとして、チャップリンの「独裁者」のスピーチかキング牧師の「私には夢がある」のスピーチを発表する。「紹介スピーチ」の発表、そして「訓練総括レポート」が課せられる。昨年度の場合は、「この訓練を受けて役に立ったこと」「役に立たなかったこと」をそれぞれ原稿用紙1枚にまとめよというものであった。

その中から特徴的なものをあげてみる。

ためになったこと

この英語音声訓練を通して、私は、初めて英語の本質に触れることができたように思う。今まで中学・高校で6年間学んできた英語は、まさに受験対策であった。これはこれで役に立ったのだが、英語の何たるかは全く理解していなかった。つまり、英語圏と日本では、文化も考え方も基本的に違うということが分かっていなかったのだ。訓練において、腹式呼吸から増幅法による子音の重視、自己を客観視することなどを学び、英語の音声を自分のものにするために努力した。訓練を始めた頃は、舌の根を硬くし、口形を維持させることがなかなか難しく、誰も見ていないときはタコ口にしたり舌出し運動を行ったりしたものである。四月から始めたこの訓練も、ようやくここに一つの区切りを迎えた。私の英語音声はまだ未熟だが、何が大切なのかは理解できたように思う。さらに英語音声に磨きをかけ、英語圏の文化を理解し、地球人の視野で日本を見つめられるようになりたい。

- 腹式呼吸ができるようになった。
- 他人の音声をうまく聞き分けられるようになった。
- 自分の音声をテープで聞くことにより、自分の音声の悪い点や特徴を認識できた。
- 英語式の考え方を身に付け、自分のいい点の要点がすぐに思い浮かぶようになった。
- スピーチと会話、文書との違いが理解できた。
- 英語を（少し）話せるようになった（かも知れない）。以上。（男子）

英語音声訓練を受けて自分のためになったことは、何より、英語を話す以前の英語音声身に付ける学習の場を体験できたことである。中学・高校と学んできたつもりであった英語の音声訓練は、ただ模範者の音声を物まねするだけだったとわかった時はショックだったが、それでもまだ早いうちにこの訓練を受けて良かったと思う。具体的に効果があったことは、音が出るようになり破裂音が響くようになったことである。原音がいかに大切であるか、また、日本語を母国語とする者には大変難しいことも常に感じとれた。スピーチでは、音の連結・表現力は成果があったと思う。また、紹介スピーチの時は、日本語がいかにあいまいで、英語ではいかに具体性が問われるかが自分でスピーチを作ってみて強烈に感じた。自分は日本人であることを訓練でつくづく実感したが、英語で意志を伝える要領を基礎から得られて、かえってプラスになったと思っている。（女子）

この訓練を受けてためになったことは、「つもり現象」に気づかされたことである。自分ではきちんとやっているつもりなのに、しかしそれはあくまでも「つもり現象」であるため、相手に自分の考えが自分が思っている程ははっきりと伝わっていない。そのことをまざまざと見せつけられた。初めは「どこがどう」つもり現象なのかさえわからず、不安とくやしさが頭がいっぱいだった。しかし、日本語と英語の間に存在する大きな思考回路の違いを徹底的に指摘されることにより、しだいに何が原因なのかははっきり理解できるようになった。結局は自分自身の独り善がり根底にあるのである。それに気づいたことが、この訓練で学んだ一番大きな収穫であった。

これからはこのことを頭にたたき込んだ上で、英語を理解してゆきたい。（女子）

訓練を受けて自分が最も良かったと思うことは「強く独立した英語子音の発音方法を理解することができ、英語スピーチにおける自分の意見の明確な表現法の基礎を、養うことができたこと」だ。訓練では子音を規定量に到達させるために、口輪筋の緊張・口形・声と息を同時に出す・舌の位置、などといった事項に留意した。訓練が回を重ねるにつれ子音の弱さは徐々に克服され、今ではスピーチにおける主張・表現を、イントネーションによってだけでなく、子音のアタックの強さによっても行えるようになった。

言語の音声構造を決定づけているものは、その言語を使う人々の行動様式・価値体系、つまり文化である。訓練は英語圏と日本の文化面の違いを知ることによって音声面を考察していった点がすばらしかったと思う。この訓練を受けて、外国語とは文化面をとらえた上で学ぶべきものなのだ、ということに気付くことができ、本当に良かったと思う。（男子）

ためにならなかったこと

英語音声訓練を受けてためにならなかったことは、全ては自分自身の努力不足なのだが録音したテープを大いに活用しなかったために、特に他人の音声に対しての分析が甘くなってしまったことだ。これは音声訓練中に、他人の音声に対するトレーナーのコメントと自分の分析とズレていた時などはそう感じた。私の耳は他人の音声を鋭く客観的に分析しているとはいえない。また、一週間に一度の訓練では、どうしても各々の毎日の自宅での練習が結構重要になってくると思うのだが、私の場合長期休暇などで2カ月ぐらい間があいてしまうと口形がくずれてしまったり、舌の巻きが足りなかったり練習不足がたたった。

私が音声訓練を受けてためにならなかったと思うことは、自分自身の練習不足が原因である。（女子）

この訓練で為にならなかった事というより残念に思った事がある。それは、スピーチが少し中途半端だった事である。

私たちはこの一年間、口形、呼吸、舌の位置緊張などから始まり、アルファベット、単語と基礎を何度も繰り返し土台を固めた。そしてスピーチのサンプル「THE DICTATOR」と「I HAVE A DREAM」を訓練した。これらは長い時間をかけて完成された。その中で様々なスピーチにおけるアドバイスをもらい、それなりに身になったと思う。

しかし、最後のスピーチが、少し足りなかった。私達は、もっとスピーチをたくさん作って発表すべきだったと思う。日本人はスピーチに慣れていないので実際にやりたかった。もう少し時間があれば出来たことだろう。これは他人のスピーチをよく聞くことで補えたような気もする。(女子)

私にとって最も”ためにならなかった”ことは、この訓練を終えた今、日本の英語教育に対して非常に怒りを感じることである。英語が、日本語の文法体系と異なることは生徒たちに教授しても、音がとても重要である英語のその発音方法は少しも教授してくれない。

私は英語の教師になろうとこの大学で教職を取っているが、今の日本の英語教育を変えてみようという意志よりもむしろ教員になりたくないという意志が強まってしまった。

こまったことだ。私はこの自分の考えの裏には、”自分が日本人だったのだ”ということに気づかされたショックがあるのかも知れないと思う。努力しても完全なアメリカ人にはなれない。英語の教師は、不完全なものを教えればいいのか。それでは英語科目は必要なくなるではないか。教師は日本人なりの発音方法を教えればいいのか。私はこのような疑問に適切な答えを見つけ出さなくてはならなくなった。(男子)

英語音声訓練のメニューは全て自分にプラスとなって働いたのだが、メニューの中にはプラス面と同時にマイナス面に働いたものもあった。訓練を受けるようになって自分が悪い方向に走った点を述べると4つある。(1) 英語の文章を読んでいる時 [P] や [B] で始まる単語に出会うと、破裂音をしっかり出そうとするあまり、それらの単語の前で一呼吸おいてしまうことが多くなった。(2) 英語の文章を読む場合、1つ1つの単語を明確に発音することに熱中し、リズム・イントネーション・スピードに気を配らなくなった。(3) 増幅音を徹底した結果、訓練を離れた今も増幅音のままである。(4) 日常英会話までも「Dictator」の子音の勢いでやってしまいそうになった。

(1)～(4)は全て、訓練による弊害というよりも、私自身の努力が今一歩及ばなかったから生じた結果である。今後、私自身がさらに努力すれば乗り越えられる問題といえよう。(男子)

はっきり言って役に立たなかったことはあまりなかった。しいていうならば、講義中の待ち時間であった。他人のをよく聞くということはおそらくわかったが、時には自分まで順番がまわってこないこともあった。他人のを聞き、いい所をまねし、先生方に注意されている所を自分自身も気をつけてやろうと思っても順番がまわってこない、その場でそれを試すことができない。1人1回は発表する機会が欲しかった。また前期の終わりに行われた筆記テストは、あまり役に立たなかった。みんな一夜づけみたいな感じで覚えるだけであり、覚えたとしても、それを頭に入れて発声させる必要がある、実際に発声させるテストの方がよかったと思う。そしてその成果と最後の成果を比べるようなことをした方がいいと思う。(男子)

訓練成果と今後の課題

昨年度の33名の訓練生についての訓練成果について述べてみよう。

昨年度の訓練生は、全ての訓練課程を総合して60%以上のものを合格としたが、全ての訓練生がこの基準を満たしていた。最低限、音声の違いを聞き取れるようになり、大きな声を出すことができ、子音・母音とも基準以上の発音ができるようになった。しかし、その完成度は個人差があった。この訓練を理論

的にも肉体的にも理解し、訓練の目的に添った音声はほぼ80%以上出せるようになった学生が3分の1、理論的にはほぼ理解し、音声の完成度が今一つという学生が3分の1、そして残りの3分の1は、何がなんだか分からないが必死になって訓練に食らいついてきたが、目的にあった音声とそうでない音声との区別をはっきりとは自覚できていない学生である。最後のグループの学生は、一応音声的には合格点なのであるが、自分が発する音声を自分なりに工夫できないレベルである。しかし、今後の各自の努力次第では、上位2グループにも逼迫する可能性はある。1年46コマという限られた訓練時間というものを考慮すれば、全体的に訓練は成功だったと考えられる。

今後、訓練生の音声がどのように変化していくか追跡調査したいと思っている。

発想訓練では、中間日本語の訓練も兼ねて行っている。中間日本語については、論理構成はほぼ英語と同じような構成で、クリアな音声で意味も明確な日本語と考えていただければよいかと思う。これについては、前稿でも触れているので、そちらを参照していただきたい。この中間日本語の理論を発展させて、日本語によるディベート訓練も行っていきたいと考えているところである。昨年度の訓練生や今年度の訓練生の中にも「日本語ディベート」に興味を持っている学生がおり、不定期ではあるが、初歩的な訓練を開始しているところである。今後発展させていきたいテーマでもある。日本語によるディベートを訓練することにより、曖昧な日本語を明確な日本語にし、そのままの形で英語におき直すことができるような論理性を持った日本語を確立していくことこそ、世界の中で孤立しない日本・日本人を創り出すことになるのではないかと考える。このような明確な言語・考え方を創り出すことによって、世界の人々との相互理解が生まれるのではないかと考える。

この新しい日本語を創り出すためにも、本学が開講している「英語音声訓練」は大いに役立つと期待している。

<参考資料>

[1994年6月18日(土)朝日新聞] ぜみなーる

日米理解阻む四つの壁——原因は理解不足と誤解

新 将命(あたらし・まさみ) 36年生まれ。早大卒。シェル石油などを経て、82年ジョンソン・エンド・ジョンソン社長。92年から現職。94年サラ・リーコーポレーション副社長。

「世界中でもっとも重要な二国間関係」。マンズフィールド元駐日米大使は、ことあるごとに日米関係の重要性をこの言葉で強く訴えた。ところが、現実には両国で世界の国民総生産(GNP)の40%近くを占めるといふこの二大経済大国の間には、摩擦が絶えない。

二者間に摩擦が生じた場合、二つの原因が考えられる。一つは摩擦が生じても仕方がないような事実が存在する場合、もう一つは理解不足または誤解に起因する場合である。これを突きつめると両者間のコミュニケーション不足とその結果としての相互理解の欠如という根本原因につきあたる。

事実はその存在を否定できないが、誤解はコミュニケーションと相互理解の改善によりかなり解消することができるはずである。はずであると言ったものの、そう簡単にはことが運ばないことは、何よりもこれまでの日米間の摩擦とあつれきの歴史が証明している。いったい何が問題なのか。

私は日米両国の間には相互理解を阻む四つの壁がそそり立っていると考えている。

高く厚い文化の差

その第一は言葉の壁だ。日本語を話せる米国人の数も英語を操る日本人の数も近年だんだん増えてはいるが、日常会話に不自由がないということと利害関係の伴う交渉や議論ができるということとはまったく別物である。二大経済大国の国民がそろって名うての外国語下手というのは皮肉で不幸な偶然でもある。

第二は文化と習慣の壁。私がビジネスの場で日常経験する例をいくつかあげてみよう。日本人が公正、フェアという場合は長年の関係尊重だが、米国人は万人に対する平等の機会重視。日本のプロセスや努力

評価に対して、米国は結果重視。日本は長期の目標のためにはしばしば短期の目標を犠牲にするが、米国は短期志向だ。日本は両者がそれぞれ勝つ「共勝ち」(Win Win)に重きを置くが、米国では「一人勝ち」(Win Lose)で押してくる。このほか日本の集団主義と米国の個人主義など例はたくさんある。

第三は理念と原則の壁。およそ優れた企業には企業理念や経営の原則がある。日本株式会社をみると、この二つがあるとはどうしても考えられない。アメリカ株式会社も同じこと。理念も原則も無い二者間の交渉は、えてしてその場主義の泥仕合になりがちである。

第四の最も困難な壁は肌の色の壁である。これが完全に打ち払われることは永久にありえないと覚悟しておいた方が現実的である。「世界は一つ、人類みな兄弟」的なスローガンは努力目標としては立派だが、それ以上でもそれ以下でもない。

この四つの壁と直面しながら相互理解を深めるには、米国側に注文したい点も山ほどある。だが、まず「随(かい)より始めよ」の精神で、日本側が努力すべきだろうと考えている日米理解促進の処方せんがいくつかある。

沈黙は禁、発言を

まず強調したいのは「スピークアウト (Speak Out) する日本になろう」ということだ。日本について、日本人はほとんど声を発しない、文化はささやくのみ、カネは小声で語り、商品は大声でどなる、軍力は完全な沈黙——という比喩もある。

自己主張の力学を武器として、居たけだかに迫ってくる米国に対し、察しの美学を頼みに対応したところで、波長は合わない。米国人の発想には、しかるべくとかそこをよしなに、といったことは基本的には存在しない。沈黙は禁と心得て、とりあえず発言量を二倍にすべきである。

もう一つ、これもコミュニケーションがらみの処方せんだが、「話に論理の糸と数字の裏地を」ということがある。学校の教育課程に討論(ディベート)やスピーチが無いのか、または伝統的な国民性のせいなのか、私の三十五年におよぶ国際ビジネス界での経験をふり返っても、一般的に日本人の思考や表現は感情的であり、情緒的だ。論理の糸らしいものがあるとしてもすぐにブツと切れてしまう。「なぜ」「なぜならば」(Why Because)の訓練も、「反対することに賛成すること」(Agree To Disagree)も苦手である。日本人よ、もっと理屈っぽくなれと、あえて主張したい。

また、米国人は計算や数字に弱いというのは俗説であり、少なくとも私の知っている幹部クラスの米国のビジネスマンは例外なしに数字の達人である。こちらでも数字武装で対応すれば、論理のもつれもほぐれ、理不尽な要求のほこ先もかわすことができるだろう。

語学力とゆとりと

最後は、金もうけとゴルフにうつつを抜かすだけではなく、「一人の人間として幅広い教養と威厳を身につけた国内人になる」ということである。その上で、英語でジョークの一つも飛ばせるくらいの語学力と心のゆとりを持った日本人。こういう人材が国際舞台に数多く顔を出すようになった時、しっとされ、危険視される日本から「尊敬される日本」への変身も可能になるだろう。

さて、一方の米国人は、どんな処方せんを書いてくれるだろうか。

[窓 解説委員室から 2/17/94 朝日新聞夕刊]

けんか腰

相手の説明をよく聞いて、それを前提に質問するというのが日本の記者会見の暗黙のルールである。米国の記者会見は少し趣が違う。

会見者の説明が終わるか終わらぬうちにハイ、ハイとわれ勝ちに手を挙げ、説明内容とまったく違うテーマについて質問をぶつける。自分の意見を延々とまくしたてる。説明されたことを聞いていないのか、平気でもう一度同じ説明を求める。

もう十年以上も前になるが、ワシントン特派員時代に米国人記者の徹底した自己中心ぶりにびっくりしたものである。

「日本は携帯電話の市場を開放していない」と力説するカンター通商代表の姿をテレビで見て、自己主

張がぶつかり合うワシントンの雰囲気を出した。会見では内容の正確さより自分の主張をいかにアピールするかが大事なお国柄である。

日米首脳会談での新経済協議が物別れに終わったあと、米政府の対日姿勢がにわかにトゲトゲしくなった。

クリントン大統領は「日本との貿易戦争はあり得る」と、まるでけんか腰である。円相場が急騰したことも、日本いじめのために米政府が投機筋の背後で糸を引いているのではないかと疑心暗鬼になるほどだ。

しかし、「日米開戦前夜」と身構えることはあるまい。米国は対日強硬姿勢を演出することで日本側の危機意識を高め、できるだけ譲歩を引き出そうとしているのではないかと。

実際、移動電話のクロ認定にせよ、制裁内容は三十日以内に決め、発動されるとしてもかなり先になる。その間に歩み寄る余地は十分残されている。

それにしても、モトローラ社製の携帯電話を手に熱弁をふるうカンター氏はまるでセールスマン。「トランジスタ商人」といわれたかつての日本の首相も顔負けである。〈参〉

[窓 解説委員室から 7/2/94 朝日新聞夕刊]

討論の文化

古い資料を整理していたら、約三十年前、米国の高校に留学していたときの教科書が出てきた。「ディベート(討論)」の授業に使ったものだ。

ディベートといえば、一種の知的ゲームである。あらかじめ決められたテーマについて、二人一組のチームが賛成、反対に分かれて討論し、どちらの主張に説得力があるかを競う。

詰め込み教育の日本から来た留学生にとっては、こんな科目が高校の授業に組み込まれていること自体が驚きだった。

しかも、そのテーマが重かった。「米国の外交政策として西半球共同市場を促進すべきかどうか」である。ここでいう「西半球共同市場」は南北アメリカ大陸全域の自由貿易圏をめざす遠大な構想だ。

高校生が自分の国の外交政策をめぐる丁々発止とやり合う。議論好きの国民ならではの話だが、「共同市場」構想は、四半世紀以上がたった今年一月、米国、カナダ、メキシコ三カ国が参加した北米自由貿易協定の発効で実を結んだ。

最近、日本でもディベートを授業にとり入れる学校や社員研修に使う企業が増えていると聞いた。いいことだと思う。

国際化の時代にあわせ、教育現場で「自分の考えを自分の言葉で表現できる人材を育てるのがねらいである。ビジネスの世界でも、外国企業との交渉力を強めたり、社内の議論を活発にしたりするのが、おもな目的になっているようだ。

二年前に発足した国際ディベート学会の松本道弘会長(名古屋外語大教授)は、「討論の文化」を根付かせることが国の将来を誤らない道だという。

思いがけない村山連立政権の登場、円の急騰と、一寸先が読めない混迷が続く。いまほど全員参加の知恵くらべが必要なきはないだろう。ディベートの時代にしたい。〈鯨〉

[単語一覧]

p-	park	pen	pig	pot
b-	bat	bed	boy	book
m-	mother	make	milk	moon
f-	fire	fish	four	foot
v-	violin	vest	very	visit
s-	sun	seven	sit	school
z-	zebra	zipper	zone	zoo
t-	tiger	table	teeth	toe
d-	down	desk	dish	dog
n-	nurse	net	nail	no
l-	lion	leg	lily	leaf
r-	right	rabbit	rain	room
k-	kite	kill	key	keep
c-	come	cat	car	cold
g-	gate	girl	give	go
-ng	sing	king	swing	long
-x	ax	box	six	textbook
h-	hat	head	here	horse
w-	work	window	watch	woman
wh-	whale	whistle	what	wheat
qu-	quiet	question	queen	quarter
th-	thumb	thread	think	thick
th-	this	that	these	those
sh-	shell	she	ship	shop
ch-	child	church	chair	cheese
j-	just	Japan	jet	July
y-	young	Yes	yacht	you

<参考文献>

- 中津燎子 (1995), 『英語音声訓練テキスト (増幅音による) 1995年度版』, 宮崎公立大学
中津燎子 (1986), 『未来塾って, 何? -異文化チャレンジと発音』, 朝日新聞社
中津燎子 (1978), 『何で英語やるの?』, 文芸春秋社
中津燎子 (1983), 『再び何で英語やるの?』, 文芸春秋社
中津燎子 (1975), 『呼吸と音とくちびると - なんて英語やるの? 反響編 -』, 午夢館
松本茂 (1994), 『3カ月英会話テキスト7月号』, NHKテキスト出版
松本茂 (1994), 『3カ月英会話テキスト8月号』, NHKテキスト出版
松本茂 (1994), 『3カ月英会話テキスト9月号』, NHKテキスト出版
松本茂 (1995), 「教室に英語ディベートを!」『英語教育1995.9』, pp. 29-31, 大修館書店
松本茂 (1995), 「スピーチ指導を成功させるために」『現代英語教育1995.10』, pp. 16-18, 研究社出版株式会社
松本茂 (1995), 「英語でディベートをするためには」『English Journal 1995.10』, pp. 54-55, アルク
松本茂 (1987), 『英語ディベート実践マニュアル』, バベル・プレス
若林俊輔 (1995), 「スピーチI Have a Dreamの魅力」『現代英語教育1995.10』, pp. 25-33, 研究社出版株式会社
山本文雄 (1995), 「基本的な音声指導をどうするか」『現代英語教育1995.10』, pp. 22-34, 研究社出版株式会社
竹野茂 (1994), 「本学における『増幅法による英語音声訓練授業』について」『宮崎公立大学人文学部紀要第2巻第1号』, pp. 41-52
辻内鏡人・中條献 (1993), 『キング牧師 人種の平等と人間愛を求めて』, 岩波ジュニア新書221, 岩波書店
本田創造 (1991), 『アメリカ黒人の歴史新版』, 岩波新書165, 岩波書店
チャールズ・チャップリン著 (1964), 中野好夫訳 (1966), 『チャップリン自伝』, 新潮社
塩原慎次朗 (1987), 『声をだして読む日本語の本』, 創拓社
竹内敏晴 (1975), 『劇へーからだのバイエル』, 青雲書房
荒木博之 (1994), 『日本が見えると英語も見える 新英語教育論』, 中央公論社
池浦貞彦・泉マス子・板倉武子 (1990), 『最新英語音声学』, 成美堂
近江誠 (1984), 『オーラル・インタープリテーション入門』, 大修館書店
文部省 (1989), 『高等学校指導要領解説 外国語編英語編』
文部省 (1992), 『高等学校外国語指導資料 英語を聞くこと及び話すことの指導』
文部省 (1992), 『中学校指導書外国語編』
文部省 (1991), 『中学校外国語指導資料 英語を聞くことの指導』
文部省 (1993), 『中学校外国語指導資料 コミュニケーションを目指した英語の指導と評価』